

不登校児童・生徒に対する適応支援活動の実践と 「リスクールプログラムモデル」の開発

－大学における支援の実践と新しいモデルの開発－

大久保千恵

(奈良教育大学 次世代教員養成センター (ESD・課題探究教育部門))

玉村公二彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (特別支援教育))

谷口尚之・尾本潤治

(奈良教育大学附属中学校)

山室光生・中窪寿弥

(奈良教育大学附属小学校)

市来百合子

(奈良教育大学 次世代教員養成センター (ESD・課題探究教育部門))

松川利広

(奈良教育大学 教職開発講座 (教職大学院))

Practice for Supporting Students for Non-Attendance at School and Development of “Re-school Program Model”
Practice for Supporting Students at University and Development of New Model

Chie OKUBO

(Teacher Education center for the Future Generation, Nara University of Education)

Kunihiko TAMAMURA

(Special Support Education, Nara University of Education)

Naoyuki TANIGUCHI, Junji OMOTO

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Mitsuo YAMAMURO, Toshiya NAKAKUBO

(Elementary School Attached to Nara University of Education)

Yuriko ICHIKI

(Teacher Education center for the Future Generation, Nara University of Education)

Toshihiro MATSUKAWA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学では、附属小・中学校の不登校児童・生徒に対する適応支援活動を2014年10月より開始した。本稿ではその活動の概要について報告した。また、大学が独自に行う現在在籍している学校への再適応支援及び進学した学校での新たな適応支援を目的とした「リスクールプログラム」の開発について検討を加えた。

キーワード：不登校児童・生徒 Students of Non-Attendance at School
支援の実践 Practice for Supporting Students
リスクールプログラムモデル Re-school Program Model

1. はじめに

文部科学省は、不登校の児童・生徒を「何らの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間30

日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。文部科学省の学校基本調査によると、上述した定義による2014年度の不登校児童・生徒数は、小学生が25,866人、中学生が97,036人で、前年度より小学生が1,691人、中学生が1,594人増加していた。

文部科学省(1992)は保健室登校や別室登校なども出席として扱うことを公示しており、不登校児童・生徒は、学校内外における様々なサポートを受けている。学校内においては、保健室・別室登校、放課後登校による学習支援、スクールカウンセラーによるカウンセリングなどがある。また学校外においては、市町村の教育委員会が設置する教育支援センター(適応指導教室)や民間のフリースクールなどへの通室・通学、児童相談所、精神保健福祉センター、医療機関などにおける様々なケアなどである。

奈良教育大学附属小・中学校には、不登校児童・生徒が例年10数名いる。奈良市の教育支援センターは現時点においては、国立大学附属学校の児童・生徒の利用が難しい。また、そのような状況とは別に、学校との連携を十分にはかり、スムーズに登校を再開できるように支援するためには、附属学校独自のシステムを持つことも必要ではないかと協議されてきていた。児童・生徒およびその保護者の多くからも、進路に向けた不安の解消、基本的な生活習慣の定着、基礎学力の保障、中学校では高校受験に関連する内申点の担保などを見据えて、大学法人による学校外の学びの場の提供を求める声が強まってきていた。

大学における不登校児童・生徒への支援活動については、2006年に福岡大学が、全国で初めて通級型の学校適応支援教室「ゆとりあ」を開設したとされている。松永(2014)は、不登校となって家庭にとどまることは、一種の退行状態であるが、青年期周辺になると、かつてのように親に甘えることもできず、孤立感と敗北感を募らせることになる、しかも不登校の場合は、本来発達を促進する仲間集団の経験からも遠ざかってしまうことになる、と述べている。そして、子どもたちにとって「家庭」と「学校」の中間的で過渡的な仲間との集団活動の経験は大きな意味を持つ、としている。

また、和光大学では、2013年度より適応支援室「いぐお〜」の活動を行っている。高坂(2015)によると、大学内に適応支援室を設置することは、大学の地域貢献という社会的意義、保護者の経済的負担の軽減、学生の教育的効果がある、とされている。学生の教育的効果については、心理援助職を目指す学生にとって、「いぐお〜」は、理論・知識と実践・経験を融合させる場である、と指摘している。

本学において、不登校児童・生徒への支援活動を行うことは、児童・生徒の居場所づくりを担うとともに、学生の教育臨床実践力を高める目的を持つ。

そこで、2015年度より、第一筆者がその運営を担う適応支援活動を開始することとなった。この活動は、開室当初に参加していた生徒たちと附属中学校校長により、「高畑ほっとヒルズ・アルコバレーノ(イタリア語で「虹」の意味)」と名付けられた。(以降「アルコバレーノ」と略)。また、サポートする学生のことは「サポート・フレンド」と呼ぶことになった。

本稿では「アルコバレーノ」の活動について報告するとともに、奈良教育大学において行う独自の不登校児童・生

徒に対する「リスクールプログラムモデル」の開発について検討を加える。

大学附属学校園の児童・生徒およびその保護者には、入学時に大学における調査研究の対象となることがあるということについて説明と同意がなされている。また、本研究報告では、児童・生徒はアルファベットを用いて表記し、個人が特定されることはないよう配慮した。

2. 活動の概要

2. 1. 活動の開始まで

活動は2014年度より開始された。附属中学校の生徒の支援のニーズがあったので、まず、附属中学校の教員会議において、本活動の枠組みの設定や本活動への参加を学校への出席とするべきかなどについての協議を行った。その結果、副校長が本活動への参加の必要性を認めた生徒が参加でき、参加した場合は学校の出席として扱うことになった。その後、附属小学校の児童への支援を開始する時には、同様の協議を経て活動を開始した。

教育大学である特色を活かす観点から、市町村の適応指導教室とは異なる活動の在り方を検討する目的で、一人の児童・生徒に対して一人の学生が主となるサポーターとして対応し、二者関係において十分なラポールが形成されてから集団活動に移行していくことにした。

校内での合意が得られてから、附属中学校の不登校状態に陥っている生徒、およびその保護者に個別に本活動についての説明を行った。参加に際しては、生徒の希望と学生の都合を合わせて来室日を設定すること、ほかの不登校生徒と顔を合わせることがあること、集団活動もあることなどについて保護者と生徒に説明し、同意を得た。

サポーターとなる学生は授業等を通して募集され、登録された。学生に対しては、事前指導を行った。事前指導では、不登校児童・生徒の理解、サポートのありかた、守秘義務の厳守、毎回の活動内容の報告の義務、実際の運営を担当する第一筆者への「ほう・れん・そう(報告・連絡・相談)」を徹底して行うことなどについての指導を行った。

活動の中心となる場所は、次世代教員養成センター内に確保されていたカウンセリング待合室兼遊戯療法室を使用することになった。からだを動かす活動を重視していたので、大学内の体育関連施設の使用を願い出、保健体育講座より許諾を得た。調理のためには、大学構内にある特別支援学級の調理室および大学の調理実習室を使う許諾を得た。

2. 2 活動の基本的な方針

活動における基本的な方針は以下のようなこととした。

- ・からだを動かすことを重視する。(体力づくりだけではなくメンタルの安定や学習意欲にも効果があるのではないかと、という考えが背景にある。)
- ・楽しいことをたくさんする(楽しい経験の積み重ねや遊びが子どもの意欲を高め、頑張ることにつながるの

はないかという考えが背景にある。)

- ・安心できる場所を提供する
- ・学生と生徒が十分にラポールを形成してから集団活動へつなげる
- ・生徒に関わるチームの合意を重視するため、関わるチーム員のミーティングをしっかりと行う。
- ・附属学校⇔学生、附属学校⇔第一筆者、学生⇔第一筆者における「ほう・れん・そう（報告・連絡・相談）」を徹底する。(学校と連携を密にすることはもとより、サポートを行う学生の疲弊をさける目的がある。)

2. 3. 活動の進捗とその概要

最初の生徒は2014年10月1日から参加を開始し、徐々に参加する生徒が増えていった。当初の実施計画においては、週1回または月1回のペースで開催する計画であったが、生徒からの来室希望が予想外に多かったため、生徒の希望に沿うように活動を展開していった。

2014年10月1日から2015年3月31日までの初年度には、小学校4年生1名、中学校1年生1名、2年生2名、3年生3名、が参加した。生徒の参加回数は、Aさん59回、Bさん58回、Cさん42回、Dさん24回、Eさん23回、Fさん3回、Gさん10回で、延べ参加数は220人であった。

2015年4月1日から2015年11月30日までには、小学5年生1名、6年生1名、中学1年生1名、3年生5名が参加した。生徒の参加回数は、Hさん78回、Iさん54回、Jさん26回、Kさん14回、Lさん19回、Mさん36回、Nさん7回、Oさん3回で、延べ参加数は237人であった。

活動時間については、最初は1時間程度から始めたが、徐々に時間が延びていった。昼食もはさんで長い時間の活動をすると、運動、学習、遊びなど豊富な内容が盛り込むことができ、生徒の満足度も高いことがわかっていった。現在では、1週間当たりの参加回数は1回～4回、1回あたりの活動時間は2時間～6時間の幅で活動を行っている。

これまでに行った活動の内容は表1に示した。

表1 実施した活動内容

	活動内容
学習	学校の課題・学校のプリント・各自の問題集・志望校の過去問題等
入試に向けての活動	志望校さがし・エントリーシートや作文・面接練習・デッサン練習・高校入試・中学受験に備えての学習等
スポーツ	バドミントン・バレーボール・ソフトバレーボール・卓球・サッカー・テニス ドッチビー・ウォーキング・水泳など
遊び	オセロ・トランプ・ウノ・花札・人生ゲーム・百人一首・将棋・シャボン玉 バルーンアート・折り紙・けん玉・映画鑑賞・レゴ・モノポリー・レシビゲーム等
制作	ミニ四駆コース・木工(ブックエンド・椅子・リモコン入れ・本棚・ビー玉ころがし プラ版・金属加工・カード・折り紙・一人映画館等
楽器	ギター・キーボード・ボンゴ・ハンドベル等
パソコン	エクセル・ワード・パワーポイント・調べもの・描画用ペンタブの使用等
調理	カレー・シチュー・肉じゃが・お好み焼き・親子丼・パン・クッキー・チョコレート アイスクリーム・ホットケーキ・おもちゃつき・流しそうめんなど
学校行事の特別版	家庭科授業の幼稚園訪問・京都めぐり・講演会のDVD視聴・給食等
ボランティア活動	幼稚園の預かり保育・幼稚園のおもちゃつき

内容はサポート・フレンドと児童・生徒がその都度相談をして決めて活動しており、内容は多岐にわたっている。サポート・フレンドが「こんなのあるけどやってみない？」と提案をすることはあるが、学習も遊びも強制することは一切していない。アルコバレーノが児童・生徒にとって居心地の良い「居場所」になるように配慮して活動を行っている。サポート・フレンドとして関わる学生の得意分野や個性を尊重し、活動の内容については運営を担う第一筆者は多くの口出しはしない。活動中の携帯電話やスマートフォンの使用は制限しているが、ゲーム機の持ち込みなども認めており、児童・生徒が得意なゲームを通して自己表現をしたり、サポート・フレンドと交流したりしている場面もある。アルコバレーノの部屋からは、とても楽しそうな声が聞こえてくるのが頻繁であり、楽で楽しい「居場所」となっていることを実感できる。

長い期間継続して完成に至ったもののひとつに「ミニ四駆コース」がある。プラモデルのミニ四駆車を小学生が気に入って、地面を走らせて遊んでいたが、もっと速く走らせたいと、レーシングカータイプのミニ四駆車を購入した。レース用のコースは市販されているが、自分たちで作ることを第一筆者が提案し、プラスチック段ボールで作ることになった。作成した児童はカッターナイフやグルーガンを使うことは初めてで、特に刃物の使用には不安が大きかった。だが、その不安を克服し、カッターナイフを使うことに挑戦し、どんどん使えるようになっていった。作成過程では、児童の意見をとりいれながらサポート・フレンドが工夫をこらし、こつこつと作り上げていった。完成したミニ四駆コースの写真を図1に示した。現在もコースの拡大とバージョンアップを行っている。



図1 ミニ四駆コース

2. 4. 集団活動としてのイベント

個別の活動を通して、生徒が学生と十分なラポールが形成されてきたと判断された時期に、集団活動としてイベントを開催した。開催にあたっては、集団活動が生徒の失敗体験や自信喪失につながらないようにするため、ミーティングを重ねた。イベントは、2014年度は5回、2015年度は12月までに2回開催した。2014年度は中学2年生と3年生が主に参加していたが、中学3年生はすでにお互いをよく知っていたため、集団活動への移行がスムーズであった。実施されたイベントについては表2に示した。

表2 イベントの内容

	内容
2014年	
第1回	カレー作り・体育館での集団遊び・大きなシャボン玉づくり
第2回	おもにつき・体育館での集団遊び・百人一首
第3回	幼稚園での預かり保育のお手伝いをするボランティア活動
第4回	幼稚園のお餅つきのお手伝いをするボランティア活動
第5回	3年生を送る会(3年生には内緒でサプライズ企画)
2015年	
第1回	流しそめん・体育館での集団遊び、大きなシャボン玉づくり
第2回	クリスマス会

イベントは集団活動への第一歩と考えて開催したので、2014年度の第1回のイベントは楽しいことを最重視したものとして企画した。このイベントで初めて午前から午後までの長時間の活動を行った。そして、イベント後に生徒から長い時間の活動がしたいという希望が出され、学習にも取り組み始める、といった変化が見られた。推測であるがこの理由としては以下のようなことが考えられた。まず、カレーはとてもおいしく仕上がったことは自信の回復につながったのではないかと考えられた。また、みんなでドッチボールをしたり、大きなシャボン玉を作って遊んだりした楽しい経験が、集団で過ごしても大丈夫という安心感につながったのではないかと考えられた。どの生徒も普段よりも明るく楽しそうな様子であった。松永(2014)の指摘にもあるように、不登校により孤立感と敗北感を感じていた生徒たちが、久しぶりに仲間集団との楽しい経験をしたことにより、自信や学習への意欲を回復したのではないかと考えられた。

集団活動は、生徒にとって不安や緊張を伴うものであったが、サポート・フレンドと十分な信頼関係が樹立されていたので、サポート・フレンドの存在をよりどころとして不安に耐え、緊張をほぐすことができたように思う。そして、生徒同士も徐々に打ち解けていくことができ、集団の中で自分の意見が言えるように変化していった。楽しい経験を通して自信を回復していく様子が見られた。

2014年度の第3回と第4回のイベントとして行った幼稚園でのボランティア活動は、日ごろは「サポートされている側」の生徒たちが「サポートする側」にまわる貴重な体験であった。幼児の視点に合わせたり、要求にこたえたりしなくてはならないため、単に楽しいだけではなく、我慢をしたり、幼児の気持ちに添ったりすることが求められる活動であった。我が国では、中学生のボランティア活動はあまり盛んではないが、本活動に取り入れたことは特色の一つとして特筆すべきものであると考える。

2014年度の第5回イベントの「3年生を送る会」は、2年生とサプライズで企画した。入室するとともにクラッカーで出迎えられ、驚いた様子の3年生たちであったが、卒業と進学を祝福され、準備なしにもかかわらず、みんなの前で、立派にスピーチを行った。その堂々とした話しぶりに、半年の間の彼らの成長をはっきりとうかがうことが

できた。

2015年度の第1回イベントの流しそめんは、中学生が欠席になり、小学生だけの参加で行われた。夏休み中の小学校の校庭と体育館を使って行ったが、学校やほかの児童・生徒に対して心理的距離が大きくなっていた児童が、自然に学校の敷地に入り、ほかの生徒がいない校内でのびのびと過ごすことができた。

2. 5. 日々の活動の集団活動へのつながり

2015年度は、集団活動にやや抵抗が大きい児童・生徒が多く、イベントのような形での集団活動を無理に行うことはせず、日々の活動で、「一緒にやらない？」と誘う形で集団活動を行うことが多くなった。それは、トランプ、ウノ、人生ゲームなどのゲーム、テニスや卓球などのスポーツ、アイスクリーム作り、パン作りなどの調理などである。「来週の月曜日はテニスをするから一緒にやらない？」と声をかけておくと、担当しているサポート・フレンド学生が授業で時間が合わせられない場合でも、生徒が一人で参加することも可能になってきた。

2. 6. 学校の授業・行事の「高畑ほっとヒルズ アルコバレーノ」版の実施

不登校の状態にある生徒では、学校の行事にのみ参加できるケースも多いが、授業や行事に参加できない場合は、生徒にとって不利益を生じる。行事は児童・生徒の社会経験を増やす場でもある。また、授業に参加できないことにより、成績に影響することもある。アルコバレーノは、複数の学校の生徒が参加する市町村の適応支援教室とは異なり、附属学校園の生徒のみが参加しているので、学校との連携を密にすることができることが一つの特色である。それを活かし、学校の授業や行事を「高畑ほっとヒルズ アルコバレーノ版」として行うことを試みた。

2014年度には中学校の行事・授業に基づき、家庭科の授業の「幼稚園訪問」およびレポートの作成、講演会のDVD視聴および感想文作成、学校行事「京都めぐり」を実施した。2015年度には小学生の成績や行事参加に関わるものとして、図工のブックエンドや箱作り、体育の水泳検定、体育大会の児童の係作業を実施した。また、学校とのつながりをもつ活動として、小学生に学校給食をアルコバレーノで食べることを提案し、9月から継続している。

まず、家庭科で3年生が幼児の発達について学ぶ一環として幼稚園を訪問した授業の「高畑ほっとヒルズ アルコバレーノ版」では、附属中学校の家庭科教諭の指導を受けた。中学3年生がサポート・フレンド学生、第一著者とともに附属幼稚園を訪問し幼児と遊んだ。これは、先に述べた幼稚園におけるボランティア活動の前に実施された。初めて幼児と遊んだのだが、とても上手に楽しそうに遊んでいた。疲れたのではないかと心配したが、幼稚園訪問後にレポートまで完成させてしまい、感想としては「とても楽しかった」とのことだった。

また、附属中学校で開催された講演会「2050年の平和構築に向けて」の講演DVDを視聴し、その感想文を書いた。

中学校の学校行事として実施された「京都めぐり」に参加できなかった中学2年生、3年生の生徒が、附属中学校の社会科教諭の指導の下に、サポート・フレンド学生および第一著者とともに参加した。京都駅に集合し、伏見稲荷、三十三間堂では教諭からそれぞれの歴史についてレクチャーを受けてから見学した。大学から外に出たのは初めてであったが、外に出ると会話の内容にも変化がみられ、こうした学外での活動に大きな意義があることを実感した。

2015年度に実施した小学生の図工のブックエンド作りでは、小学校の図工室でのみ使用可能な電動糸鋸を使う必要があった。また、体育の水泳検定も小学校のプールを使う必要があった。そのため、どちらも夏休み中に実施した。結果として、成績表の図工および体育で「○」が増えた。体育大会に向けて割り当てられた児童の係作業もアルコバレーノで行った。この作業に起因するものではないが、児童は体育大会に出席できた。

また、学校給食をアルコバレーノで食べる、ということを経験し、受け入れられたので、献立表を見て食べられそうな日を選んでもらうようになった。小学校の教員室に給食をとりに行くのだが、児童は途中まで一緒に行き、待機し、サポート・フレンド学生が教員室まで一緒に行き、待機していた児童と一緒にアルコバレーノを持ち帰り、一緒に食べている。この試みを開始した当初に比べると「食べたい」という日が増え、食べる量も増えてきている。

2. 7. 高等学校進学への支援

2014年度には、進学を控えた中学3年生と、入試に備えた学習、過去問への対応、志望理由書や作文を書く、面接練習などを行った。面接練習は、次世代教員養成センターの教員2名の協力を得て行った。本番さながらの臨場感に生徒は大変緊張していたが、後日本番の面接後に「練習の面接の方が緊張した。先にすごいモンスターを倒しておいたから（練習の時の先生が怖かった）、本番は平気で、まったく緊張しなくてすごく上手にできた」と言っていた。また、入試に関して、トラブルを生じたケースがあったが、トラブルの翌日に生徒は「大学に相談に行く」と言ってアルコバレーノに来た。複雑な心境の中であったと思うが、問題を解決するために果敢に対応し乗り越え進学した。

2015年度には、芸術系の高校への進学を希望している生徒がデッサンの心得のあるサポート・フレンド学生とデッサンの練習も行っている。

3. 「リスクールプログラム」の開発と実施

3. 1. 大学で取り組む不登校児童・生徒の支援

大学で不登校児童・生徒の適応支援を行うことにはさま

ざまな学内のリソースを活用できる利点がある。また、現時点ではアルコバレーノは附属学校の児童・生徒をその対象に限定しているため、学校との連携がとりやすく、学校との関係を保持しつつ、学校と家庭との中間的な場所として支援活動の場を提供することができる。笠原（1977）は対人関係における「斜めの関係」の必要性について述べている。竹内（2012）は笠原の概念に近い年齢差における「ナナメの関係」としてその概念を次のように説明している。すなわち「笠原（1977）は、『叔父-甥』のような『中立的関係』を『斜めの関係』とし、『タテ軸に位置する親や教師』や『ヨコ軸に位置する同輩友人』の『中間位置する“間”の関係性』と規定している。この点に着目した枝廣（2010）は、『中学生と高校生、中学生や高校生と大学生の間に上下関係のない『異年齢間の中立的関係』がある』とし、このような『近い年齢差においてもタテとヨコの“間”の『斜めの関係』は存在しうる』とし、笠原（1977）の『斜めの関係』と区別するため『ナナメの関係』としている。」としている。まさに大学生・大学院生は児童・生徒にとっては「ナナメの関係」の存在である。学校での同級生との交流よりも安心でき、親や教師という大人とは異なる「お兄さん・お姉さん」的な存在として適度に依存できる関係が持てる。特に教育大学である本学の学生は、将来教師を目指す学生であるので、児童・生徒への関わり方の基本的なことについて学んできている。

こうした利点を活かすよう、従来の不登校支援にはないような新たなモデル＝「リスクールプログラムモデル」を開発することが必要であると考えた。児童・生徒の学校への再適応としては、現在所属している学校への再適応と、卒業して進学していく進学先での新たな学校生活への適応という2つがあると考えた。その2つを「リスクール」と考え、それぞれについてプログラムの開発を検討するべく、新たな適応支援活動の開発を試みた。

平成18年度に不登校であった生徒4万人を対象に5年後の状況を追跡調査された『『不登校に関する実態調査』～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～』（文部科学省2014）では、中学卒業後には85.1%が高校に進学し、高校中退率は14.0%とされている。臨床的にも中学校で不登校状態にあった生徒が、高等学校進学を契機に学校生活を元気に送っているケースは多い。しかしながら、長期にわたって不登校生活をしている生徒は、外出や運動することが少なくなる傾向にあり、体力の低下が生じている。その結果、体力不足から疲労が蓄積し学校を休みがちになることケースが散見されている。「学校」という環境から長きにわたって離れている生徒は、「学校」の雰囲気そのものをストレスに感じたり、じっと授業を聞くことにも不安を抱いたりしていることがある。教室の雰囲気や、学校の椅子に長時間座っていることでさえ、彼らにとっては非常にづらいことになりうる可能性がある。また、自己主張が苦手な面がある彼らにとっては、ソーシャルスキルの習得も必要とされる。そこで、新たな学校生活にスムー

スになじんでいけるように、体力づくり、学習、ソーシャルスキルトレーニング、学校の雰囲気慣れること、授業を受ける再体験などを盛り込んだものが進学していく学校でのスムーズな適応を見据えた「リスクールプログラム」である。

また、第一筆者はかねてより、児童・生徒の支援を長期休暇によって中断することは良くない、と考えてきていた。そこで、2014年度の冬休みは12月29日まで支援を行い、1月5日から再開した。春休みは、3月23日まで支援を行い4月7日より再開した。2015年度の夏休みは、休みの期間は特に設けず途切れのない支援を実施した。このようにシームレスな支援を行うのが、現在所属している学校への再適応を支援するための「リスクールプログラム」である。不登校の児童・生徒をサポートする機関として、市町村の教育委員会が設置する教育支援センター（適応指導教室）や民間のフリースクール、児童相談所、精神保健福祉センター、医療機関などがあるが、参加したことが学校の出席日数にカウントされる教育支援センターは長期休暇中は休みである。本学における適応支援活動は、長期休暇中も途切れることなくシームレスな活動を行ったが、出席日数としてカウントされている。また、長期休暇中にも適応支援活動に参加することは、休暇中の生活のリズムが崩れを予防し、新学期に向けての不安感を軽減させることにつながっているのではないかと考えられる。

3. 2 進学後のスムーズな学校再適応に向けての「リスクールプログラム」

2014年度に、高等学校進学を控えた中学3年生に「高校に進学するにあたっての不安は？」と問うと「体力、体力、体力！」と返ってきた。また「ノートが取れない。どうやってとったらいいいかわからない」「勉強についていけるか不安」「わからないときにどうしたらいいのか」などの意見もあった。

まず、体力作りのため大学構内をたくさん歩くことから始め、体育館が使えるときは積極的に運動を行った。先に報告した学校行事の京都めぐり特別版は、体力づくりの一環になり、電車に乗ること、街中を歩くこと、家族以外と外食することなどでは「リスクールプログラム」の一端を担った。

中学校の復習の学習を行い、高等学校に行くとなお一層使用頻度が上がるパソコンを使うことも取り入れた。調べ学習、ワード・パワーポイントなどを使った資料作りなどを行った。

教室の雰囲気に慣れ、学校の椅子に座って授業を受ける練習は、中学校より3名の教諭が来て、次世代教員養成センター2号館内の「モデル教室」を使って行った。生徒たちは3時間以上の授業に楽しそうに積極的に参加し、躊躇なく質問をし、先生方の問いかけに答えていた。モデル教室での授業の様子を図3の写真で示した。



図3 リスクールプログラムでの授業風景

卒業生を対象に、2015年夏休みには同窓会を開いた。担当のサポート・フレンドはもとより、担当以外でもアルコバレーノに関わっていた学生も参加し、1日はゆっくり話をし、もう1日は一緒にカラオケに出かけた。とても楽しそうであった。生徒たちからは「アルコバレーノが安心できる場所だった」「アルコバレーノに来ることで家族以外のひとと話ができて良かった」「行くところがあることがうれしかった」などという意見がきかれた。

進学先での良好な適応を支援する「リスクールプログラム」は、中学校で不登校であった生徒が心機一転をはかり、高等学校での学校生活にスムーズに入っていけることを支援するプログラムである。このプログラムには、体力作り、教室の雰囲気・学校の授業に慣れること、学力補充、パソコン・電子辞書などの操作の習得、電車に乗ることに慣れること、新たな人間関係構築のためのソーシャルスキルの習得、などが挙げられる。また、進学後に同窓会的に集まり、サポート・フレンド学生と再会し、悩みを相談する、安心感を得る、といったことも含まれると考える。

3. 3 在籍中の学校への再適応を応援する「リスクールプログラム」

2. 6. で述べたが、夏休みに、学校の図工室で電動糸鋸を使う作業をしたり、学校のプールで泳いだりすることなど、夏休み中にほかの児童・生徒がいない学校で活動を行うことや、学校給食をアルコバレーノで食べることなど、学校の授業や生活と連携した活動を取り入れることは、不登校による児童・生徒の不利益を解消し、生徒の成長にとっても意義が深いことであると考えられる。このほかには、学校が代休の日に校庭に行き、思う存分走り回ることなども行った。学校とのつながりを保持することは、学校への再適応においても必要な要素であると考えられる。また、夏休み中に教員が学習の支援を行うために毎回アルコバレーノに来たり、図工の課題を一緒に行ったりなどした。

このように、様々なアイデアを駆使して、附属学校の教員とアルコバレーノのスタッフが協力して学校への再適応を応援することが在籍中の学校への再適応をサポートする「リスクールプログラム」であると考えられる。このプログラムには、学校の課題や授業内容に取り組む、学校行事をアルコバレーノ特別版として実施する、休暇中に学校内で活動を行う、給食を食べる、教員がアルコバレーノに来て指導を行う、などがあると考えられる。

4. おわりに

奈良教育大学における附属学校園の不登校児童・生徒への適応支援活動の概要について報告するとともに、独自の「リスクールプログラムモデル」の開発について述べた。

「アルコパレーノ」は開設から満 1 年を迎えたばかりで、限られたスペースで細々と活動をしている。運営を担う第一筆者は、日々子どもたちと学生の都合を合わせ、活動の段取りをし、附属学校との連携をとることに追われている現状であり、子どもたちのニーズに応えられているのか定かではない。その日の活動が無事に終えられたことにただ感謝するばかりの日々である。この活動は学生の協力なくして成り立つものではなく、学生の尽力は素晴らしいと評価している。様々な不安定な状況下での活動であるが、子どもたちが約束した日時に、約束の時間より早く来室する姿や、日にちを増やしてほしいと希望される様子、学生と楽しそうに遊んだり語らったりしている姿を見ると、本活動の意義を感じる。しかしながら、常駐するスタッフがない状況では活動に限界もあり、様々な課題を抱えていることも事実である。

不登校児童・生徒の適応支援教室を、教員養成を目的とする教育大学が設置する意義は、子どものためにも学生教育のためにも大きいと考える。今後、体制などが整備され、エビデンスのある「リスクールプログラムモデル」が体系化されることが必要であると考えられる。

(本研究は、次世代教員養成センタープロジェクト研究経費を受けてなされたものである)

参考文献

- 笠原 嘉 (1977)、青年期—精神病理学から 中央公論社
- 松永邦裕 (2014) 大学における不登校の子どもの支援教室の実践、教育と医学、pp37-45.
- 高坂康雅 (2015) 大学内における不登校児童・生徒支援の実践と課題—適応支援室「いぐお〜る」の 1 年から、和光大学総合文化研究所年報「東西南北 2015、pp170-181
- 竹内和雄 池島徳大 (2012)「ナナメの関係」を意識した進路指導・進路指導に生かすピア・サポート活動 -、奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 21.pp215-220
- 文部科学省 (1992) 登校拒否問題への対応について
- 文部科学省 (2003)「不登校への対応の在り方について」(通知)
- 文部科学省 (2014)「不登校に関する実態調査」～平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1349949.htm (2015. 11. 25 アクセス)